

2025年12月16日
沼田直樹

「サグラダファミリアは巨大な楽器」後編 レジュメ

サグラダファミリア教会の建築家に就任したガウディは、1891年に関係者の前で語った言葉が残されています。

そして今、その時の構想が現実となりつつあります。

来年はイエスの塔が完成し、栄光の門以外は概ね完成です。

不可能と思った巨大なイエスの塔、梁の無い屋根、残響時間の少ない教会空間は完成間近ですが、巨大な楽器はまだ未完です。鐘塔からバルセロナの街に、教会内部に、どの様な音が奏でられるのでしょうか？

スペイン文化にも詳しい音楽家、下山静香さんとの対話、そしてカバソンソン作曲ティエントの演奏も楽しみにしたいと思います。

第一楽章（ガウディの独創性の序奏）

巨大なイエスの塔の完成 2026年

放物線フォルム、最先端技術、建設と観光の両立て完成へ

第二楽章（独創は美学と地域から）

ガウディの建築の独創的手法

西洋美学からの脱却

カタルーニャ独自の伝統的工法

数学革命から生まれた幾何学の利用

第三楽章（巨大な楽器の完成へ）

巨大な楽器の完成へ

それぞれの楽器の構造と種類、聖歌隊、合唱団の人数

第四楽章（流れる音、曲は？）

讃美歌と一体となる鐘の音とは？宗教儀式の時に演奏される音楽、鐘の音とは？完成時の音を夢見る

前回のあらすじ

時代背景：当時は産業革命による経済発展がありました。建築や芸術に多くの資金が用意され、街の中には次々と新様式の建築が建てられ、リセウ劇場ではワーグナーのオペラが大流行していました。
(欧洲ではワーグナーの楽劇とバイロイト祝祭劇場は知識人の間で1番の関心の的となりました)

聖地イメージ：カタルーニャの聖地はモンセラート。ワーグナーのオペラ、パルジファルの舞台モンサルヴァート城のモデルにもなっている。このオペラはバイロイトでのみ公開されていましたが、最初の海外公演はバルセロナになりました。
1913年リセウ上演

総合芸術：ガウディはこの聖地モンセラートの岩山から建物のイメージとワーグナーのオペラ「総合芸術」の影響を受けサグラダファミリアをイメージすることになるのです。

観客に究極の芸術、オペラを表現するために、ワーグナーは自ら劇場の設計を行いました。そこには劇場を楽器とする工夫があったのです。

巨大な楽器：総合芸術としてサグラダファミリアを構想するガウディはこの教会を巨大な楽器として考えました。音と光の演出、物語性。それぞれの門のファサードは聖書の世界を表現します。キリストの声を代弁する12使徒の塔、(それぞれの門に4本)からはどの様な音が聞こえるのか。バルセロナの街に響き渡り、教会の儀式では内部に置かれた大オルガンと共にそれぞれの塔の音が教会内部にも響き渡る「巨大な楽器」を構想したのでした。